

け心地よくあるのか。家族や近隣、都市の未来の歴史の中に、なるべく永く在り続けてほしいと願い、図面を描いて、模型を眺める。

ものを実現するのは当然、職人や現場監督との協同作業である。立ち現れるものの価値が認められるのであれば、図面や見積書、法的許認可といった、伝達手段と諸手続は、柔軟に考えればよいと思っっている。口頭で設計を伝え、大工の力量で心地よく、子孫へ受け継ぐと住まっても残らえる住宅ができれば、建築家の名前など残らなくてよい。ただつくる行為をめぐっての毎日のことは、できるだけ伝えていきたいと思う。

土光さんと盛田さん

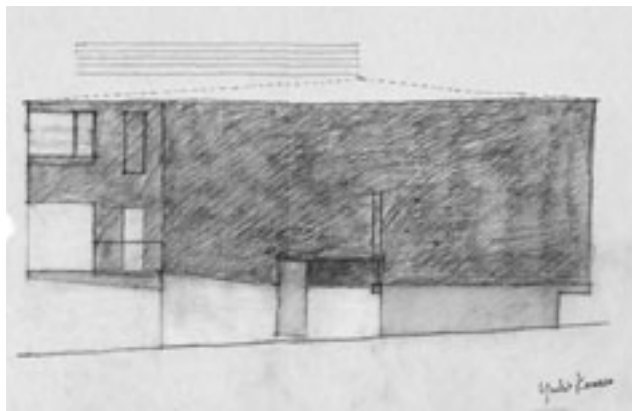
二七年前の夏の日、経団連の会議室で土光さんと盛田さんに会った。私たちの留学の激励会だったのだけれど、申し訳ないが他の方たちのことは記憶していない。

ソニーはもちろん知っていたが、土光さんが何を成し遂げた人なのか、私はまったく理解していなかった。もちろん言葉进行交流することなどできなかった。ただ、二人の顔は私の記憶に刻まれている。数十分程度の間、話すこともなく同じ場所にいた人間の形相が、これほど心に重く残ることが、

その後も含めて他にあっただろうか。土光さんの場合は目尻。盛田さんは口元。いずれも今考えてみれば、笑顔だったのだ。そのような強烈な笑顔を目撃したことは、私の人生の宝であり続けるだろう。

アトランティック・カレッジでの二年間

カレッジでの二年間は、なによりも青春の日々である。かけがえない友人をつくった。その一人の計報に先日接し、私は慟哭した。もう



華とKATANA

一週間ばかりは、仕事にならないなと思った。ただ酒の力と、妻の買ってきてくれた花、他の友からの電子メールのおかげで、比較的早く、復帰することができた。

最近ちょっと宗教がかっているのかも知れないが、彼岸で必ず会えると信じている。

自邸のハウ

三年前につくった自宅兼スタジオでは、「乗り物のような住まい」ということを考えた。電車に乗って窓外の風景が流れゆくように、それが反転して、建物の中に、都市や自然の空気・音・明かり・香りの、時間や季節による変化が流入してくれることが、私と妻にとって心地よいと思ったのだ。家の中にケヤキを植えた(中庭ではない)。

厳しい気候も否応なく入ってくるので、いわゆる建築家の住みにくい家だと言われることもあるが、これまで楽しく過ごしている。ただ八月に子どもが生まれることになって、今年はクーラーをつけざるを得なくなり、ちよつと残念である。

心配したケヤキは、家の中に植えられたという、とんでもない現実を観念したのか、今年はほどよい量の葉を出して、生きていてくれる。この原稿を書き終えたら、木漏れ陽の下でアンチョビのスパゲッティを食べます。

設計のこと・カレッジのこと・家のこと

UWCアトランティック・カレッジ(イギリス、一九七六～七八年) 八五年東京大学工学部建築学科卒業、八七年東京大学大学院修了。 八七～二〇〇〇年原広司+アトリエ・フアイ建築研究所勤務。 二〇〇一年河瀬行生事務所開設。

華とKATANA

今、競輪選手の自邸を東京の郊外に設計している。住宅プロデューサーの山本卓男



筆者と自邸

河瀬行生事務所
かわせ ゆきお

河瀬行生
かわせ ゆきお

さんから与えられたタイトルが、「華とKATANA」。

競輪という過酷なスポーツを仕事とし、日々肉体を研ぎ澄ませているアスリートの人間像を、あからさまにはなく表出すると同時に、彼とその妻、生まれくる子どもたちの安らぎの空間を「その場所に」つくること。あるいは「その場所を」つくること。一〇〇万平米に近い建物の設計に携わってきたが、超高層と小さな住宅と、規模の比較は無意味である。それぞれが果てしなく重たい。

建築家に頼むクライアントとしては驚くほど、住まいのトレンドなどに固執しない、真っ白なページのような二人。川が近く、比較的平坦な地形にあり、そばを郊外電車が通過する、広くはない敷地。現実離れし

●(社)ユニテッド・ワールド・カレッジ(UWC)日本協会は、世界各国から派遣されてくる生徒たちとの教育体験の共有により、国際感覚豊かな人材を養成するという理念を掲げるUWCの日本委員会として、毎年一〇名以上の高校生を世界各地にあるUWC傘下の高校に派遣し、すでに三七〇名以上の卒業生を輩出している。

た低予算。

設計という旅

私は、建築を設計する行為は、旅行のよ
うなものだと思っている。言い方を変えれ
ば、「設計をめぐるランドスケープ」がそ
こに現れる、という想いがある。旅の中で、
さまざまな人と出会い、話に耳をかたむけ、
知恵を授かり、風景を眺め、土地の因習に
困惑し、時間を気にして、別れを惜しんで、
ある印象を心にとどめたり、なるほど理解
したと確信したり、決して解けない謎が沈
殿したりする。

ものつくりの建築

旅の果てには旅行記が、記憶であろうと
活字になろうと、必ず残るのだけれど、そ
れだけではもちろん、私たちの生業は成り
立たない。ものとしての建築が結実しなけ
れば、社会的意味をもたない。

ものとしての建築と、そこに内包される、
あるいは外部に随したがえられる空間が、どれだ